

着衣着火から住まいの環境へ発展させる「安全・安心」の授業

——高齢者を中心に——

A Lesson Proposal on Safety & Security as a Home Economics Subject in Junior High School Uniting Clothing Viability and Housing Environment : The Focus on Elderly People

北又寿美¹⁾ 今村律子²⁾ 赤松純子²⁾
Toshimi KITAMATA Ritsuko IMAMURA Junko AKAMATSU

(¹⁾有田市立箕島中学校、²⁾和歌山大学教育学部家政教育専修)

2010年11月2日受理

Abstract

According to the new government guidelines for teaching published in 2009, home economics has been divided into 4 fields: food, family, clothing & housing, and consumers & environment. Because clothing and housing have their own academic fields, those two have been taught separately in classes of home economics at school. Now, however, we must consider combined lesson plans for both the fields of clothing and housing. In this study, we propose a home economics lesson where the fields of clothing and housing are treated together with a focus on safety & security. As clothing fire safety is a big issue among the elderly, the reason why many such accidents occur is that physical and sensory properties for the elderly are diminished. Knowledge of the physical abilities of the elderly lets junior high school students improve housing environment from a viewpoint of all those who have diminished physical abilities.

Ⅰ. はじめに

前報¹⁾において、繊維の鑑別法である燃焼実験の手法を用い、従来から行われている繊維の学習ではない衣生活の「安全・安心」の授業を提案した。すなわち、「着衣着火」を題材にし、「衣生活の自立」の中の3時間「日常着を選ぼう」の中の1時間として提示した。しかし、衣生活の自立は3時間のみで完結するわけではないので、衣生活(被服)を扱う全15時間程度の指導計画を提示しなければ、実際には授業に活用できないという課題が残った。

その間、新学習指導要領が告示され、中学校技術・家庭の家庭分野においては、小学校の内容との体系化が図られるとともに、①家族・家庭と子どもの成長、②食生活の自立、③衣生活と住生活の自立、④家庭生活と消費・環境という4つの内容で構成されるよう改善された²⁾。「C衣生活・住生活と自立」においては、衣生活と住生活の内容を、人間を取り巻く身近な環境としてとらえる視点から、一つの指導内容として構成されたのである。

しかしながら、教育職員免許法施行規則において、免許教科「家庭」の教科に関する科目では、被服学、食物学、住居学などというように独立して教科内科目が存在している。また、家政学の学問領域においても、被服学や住居学のそれぞれの内容が、人文科学系から

自然科学系に至るまで非常に幅広く存在するため、家庭科の授業においてすぐに衣生活と住生活の両方を一つの内容として授業することに戸惑いも多いと考えられる。

筆者らは前報において、「着衣着火」を題材にした授業は、家庭科の衣生活分野以外の授業内容に数多く関連させて発展させることもできる、つまり、「衣生活の自立」の内容にとどまらず、現代の生活課題を解決し、実践的に学習できるものとして取りあげることができるものであり、「住生活と自立」、「家族・家庭と子どもの成長」などへ発展させることが可能であるということも報告している³⁾。

そこで本研究では、衣生活で扱った「着衣着火」の題材を用い、衣服と住まいを関連づけた授業を具体的に提示すると共に、全30時間の指導計画を提案することとした。

Ⅱ. 「C 衣生活・住生活の自立」の新たな取り組み

1. 着衣着火と高齢者

前報において、(1)住宅火災の着火別内訳では、寝具類、衣類、繊維類及びカーテン・じゅうたん類など、繊維製品が着火物となっている割合が約4分の1以上を占めており、(2)死に至った経過の発生状況別にみると「逃げ遅れ」に次いで、「着衣着火」が2番目に多い

ことを指摘し、衣生活の「安全・安心」の観点から着衣着火を衣生活の自立の内容として授業に取り上げることを提案した。

平成21年度の消防白書⁹⁾によると、平成20年中の火災による死者(放火自殺者等を除く)1,419名のうち、着衣着火による死者数は、128名(9.0%)であり、逃げ遅れによる死者数について第2位を占めているという前年と同様の結果であった。着衣着火により死に至った経過と年齢別の死者発生状況をみると表1の通りである。この表から、着衣着火し、火傷(熱傷)あるいはガス中毒により死亡したと思われる者のうち、65歳以上が占める割合は全死者数128名中96名(75%)と非常に多いことがわかる。以上のことから、着衣着火事故から高齢者に着目することはきわめて重要であるといえる。

表1 年齢別にみた着衣着火による死に至った経過とその人数
(文献3より作表)
(平成20年中)(単位:人)

年 齢 等 区 分 (才)	着 衣 着 火							合 計	
	着衣着火し、火傷(熱傷)あるいはガス中毒により死亡したと思われるもの。								
	喫 煙 中	炊 事 中	採 暖 中 (たき火を除く)	た き 火 中	火 あ そ び 中	そ の 他 火 気 取 扱 い 中	そ の 他		
乳 幼 児	0～5	0	0	0	0	0	1	0	1
小中学生	6～15	0	0	0	0	0	0	0	0
高 校 生 及 び 成 人	16～65	4	3	1	1	0	9	13	31
高 齢 者	65～	10	16	1	31	0	23	15	96
合 計		14	19	2	32	0	33	28	128

さらに、着衣着火の原因では、喫煙中、炊事中、採暖中(たき火をのぞく)、たき火中などが挙げられているが、それらすべての原因で65歳以上の占める割合が多い。なぜ、高齢者の占める割合が多くなっているのだろうか。国民生活センターでは⁴⁾、着衣着火への対処方法として、危険をよく知るとともに、身体機能が衰えている高齢者や注意力に欠ける子どもに対しては周りの人が十分気をつけること、着衣着火が起きたときは、風呂や台所などの身近な水で消火したり、地面を寝転がって消火したりするとよい、と消費者へアドバイスしている。すなわち、高齢者では身体機能が衰えていることにより、炎が衣服に着火したことに気がつくのが遅かったり、火がついたときにすぐに次の消火動作に移れなかったりすることが想像できる。また、高齢になると炎が見えづらいたとも言われている⁵⁾ことなどからも、コンロに火がついていることに気がつかなかったり、あるいは使用していることを忘れてしま

ったりすることもあるので高齢者は特に注意するよう様々な自治体等で呼びかけられている。

現行の中学校家庭科教科書では、「住生活の自立」の内容の中に、「住まいの安全対策を考えよう」(K社)⁶⁾や「安全に住むにはどうしたらよいだろう」(T社)⁷⁾の小単元で高齢者体験が実習例として取り上げられている。こういった実習では、不自由さを体験するだけにとどまる場合や、自分たちと違って大変であるという感想にとどまっているようだ。高齢者の家庭内事故は、体験したり大変だなと感じたりするだけでは予防につながらない。また、注意力が不足していたというような個々の資質から対応策を考えるのではなく、ヒトの身体の機能に着目し、人間工学を理解して家庭内事故の予防策をとれるよう学習させたい。そのため、高齢者をキーワードとして衣生活と住生活を連動させて「家族の安全に配慮した生活環境を整える」と設定した。

2. 中学生には遠い存在の高齢者

新学習指導要領の技術・家庭科(家庭分野)における改訂の要点には、少子高齢化など社会に対応する視点があるとし、具体的には、高齢者との交流を重視すると示されている²⁾。また、新学習指導要領、第1章総則、第4の2. その他の配慮事項の(14)では、「学校がその目的を達成するため、地域や学校の実態等に応じ、家庭や地域の人々の協力を得るなど家庭や地域社会との連携を深めること。また、中学校間や小学校、高等学校及び特別支援学校などとの間の連携や交流を図るとともに、障害のある幼児児童生徒との交流及び共同学習や高齢者などとの交流の機会を設けること。」⁸⁾と記載されている。家族の形態が以前と異なってきたため、中学生が高齢者と同居している世帯が減少し、近隣の高齢者との関わりも少なくなってきたことから、上述のように高齢者との交流機会が要請されてきた。しかし、交流を実施する前には、相手に対する配慮や安全確保などに十分に気を配る必要がある。どのようなことに気を配り、何が安全なのか、あるいは危険なのかを知らなければ配慮することができない。学習指導要領解説技術・家庭編にあるように、「相手に対する配慮や安全の確保などに十分気を配るように指導する」⁹⁾必要がある。

中学生にとっての祖父母の年齢は比較的若い可能性が高く、高齢者であってもそのほとんどがいわゆる比較的元気な高齢者であることが予測される。そのため、介護のために家を改造するというような体験も身近には少ないと考えられる。身近に高齢者がいなければ、生活の中に家庭内事故のような命にかかわる危険が潜んでいることに容易に気付かない。今後、生徒達が将来就くであろう職業には、安全な製品開発・販売、建築・設計、医療・介護、行政など、高齢者とかかわる仕事は大変多いと思われる。さらに、中学生が将来の

自分のために、危険を予測して予防するための配慮や気配りができるようになるように、高齢者については義務教育の中で確実に学習させたい。

Ⅲ. 授業実践について

1. 授業展開の特徴

今回の授業提案は、あとの指導計画に示したように、新学習指導要領「C衣生活・住生活と自立」の全30時間に対応させたものである。今回は、1学年時の「衣生活の自立」の単元で、着衣着火の実験を昨年実施した生徒が、2学年で学習する授業としての提案である。授業の導入部分では、着火剤の普及やおしゃれなデザイン・ファッションスタイルによって、中学生にも注意が必要である「着衣着火」を確認した。そして、その着衣着火事故は高齢者の死亡者が多いことから高齢者の身体機能の特徴を考えるようにした。「衣生活の自立」の中で、着衣着火の実験を行っていない場合でも、火災の原因には寝具や衣服などの繊維製品が多いことから、2学年時に「住生活の自立」の一時間目として、衣生活と住生活をつなぐ授業として実施することが可能である。学習指導要領の配列順に指導計画を立てた場合は、本時を指導計画の「(10)住まいの安全」に組み込むことも可能である。いずれにせよ、(11)課題解決の学習では、衣服と住まいの両方の内容を生徒に考えさせることが出来ると考える。

高齢者の加齢による身体変化を理解させるために、具体的な展開方法として生徒に身近な携帯電話を取り上げた。高齢者向けに開発された携帯電話が普及していることを取り上げ、どのような工夫がされているかを考えさせることとした。すなわち、一つ一つのボタンが大きく、文字も大きくされていたり、音声を聞き取りやすくされたりしている。手指の巧緻性や視覚・聴覚などの感覚機能が低下していることが理由だと生徒が気付くきっかけとなる。生徒達にとって、より身近に考えられる携帯電話を取りあげることで、高齢者の特徴に気付くきっかけとし、家庭内の事故を予防する工夫につなげたい。

高齢者の身体機能の特徴を知ることがたとえば、ちょっとした段差による転倒やつまずき予防につながる具体例について、以下に示した。

- ①筋力低下で足が上がりにくくなっている
→スロープで段差をなくす、あるいは式台などで段差を小さくする
- ②筋力の低下や、腰が曲がるなどで重心にぶれが生じ、まっすぐ立つことさえ難しくよるける
→つかまるための手すりをつける
- ③足下が見えにくいいためちょっとした段差にも気付きにくい
→足下灯で明るくする
家庭内事故の予防策を一つずつ覚えていくのではな

く、加齢による筋力低下や関節の柔軟性の衰え、背面形状の変化によるバランス力低下などの身体機能の変化^{10,11)}を理解することによって、「なぜ、そうなるのか」、「なぜ、そうするのか」という対策や方法を考えつくことが出来るということが、家庭内事故を防止し、安全な住生活へとつながることを示している。IIで述べた着衣着火事故も身体機能の衰えた高齢者に重篤な事故が多いことから、その予防についてもまさしく同様のことが言える。

また、熱中症の死亡者数が1995年以降増加傾向にある。死亡率の高い高齢者の増加によって、熱中症による死亡者が増加しており、2000年以降では、全死亡者の内、男性の52%、女性の85%が65歳以上の高齢者であると国立環境研究所で報告されている¹²⁾。さらに、65歳以上では自宅(居室)での発生が特徴としてあげられている。高齢者では発汗機能が低下したり、寒暖の感覚が鈍くなっていたりするにもかかわらず、高温でも自宅で普段と同じように生活し、特別の対策が取られなかったためと考えられる。高齢者の体温調節機能の低下を理解することによって、熱中症予防の対策を考えることが出来る。

以上のように、高齢者の身体的特徴を知ったうえで、安全面の配慮が必要であることを学ぶ。そして、より安全に安心して生活するためには、生活環境をどのように工夫できるかを考えさせる。

2. 指導計画「衣生活・住生活と自立」

(全30時間)

(1)衣服のはたらきとTPO	1
(2)衣服材料について	3
(3)衣服の選択と手入れ	3
繊維の性質と安全(1)〔実験〕	
昨年度の提案授業	
着心地から見たTPO(1)	
既製服の表示(1)	
(4)衣服の手入れ実習	3
(5)生活を豊かにするための工夫	6
エコバッグの製作	
(6)生活の環境を整える(本時)	1
(7)住まいののはたらき	1
(8)住まいと家族	3
(9)室内環境の整え方	5
室内気候の調節(3)	
生活騒音と集合住宅(1)	
住まいの手入れ(1)	
トイレ掃除(宿題)	
(10)住まいの安全	1
地震・津波に備えて(1)	
(11)課題解決学習計画と実践発表	3
	+ (宿題)

3. 本時の目標

- ・高齢者の特徴について理解する。
- ・高齢者にとって、安全・安心な生活の環境を整える工夫ができる。

4. 本時の展開

学習活動	指導上の留意点	備考
<p>1. イラストから、着衣着火が大げな死亡事故につながることを確認する。</p> <p>この絵を見て、気になること・心配なことはありませんか 予想される反応 「特にない」 「火花」 「着火剤って何？」</p> <p>2. 着衣着火の死亡事故が高齢者に多いことを知る。</p> <p>3. 高齢者に着衣着火の死亡事故が多いのはなぜかを考えることによって、高齢者には中学生と異なる身体的特徴があることに気付く。</p> <p>「なぜ、高齢者に着衣着火が多いのでしょうか」 予想される答え 「脱ぐのが遅い」 「気付くのが遅い」 「大人だから火を使う」</p> <p>ヒントとして 高齢者向け携帯電話</p> <p>高齢者の特徴をまとめる。</p> <p>4. 高齢者の特徴を知った上で、高齢者が、より安全・安心な住まいの環境を工夫することを考える。 それぞれの意見を発表する。</p> <p>5. 本時のまとめをする。 感想を記入する。</p>	<p>着衣着火による危険性を知らせる。 一般的には、火花で衣服に穴があく程度ではあるが、着衣着火の死亡事故、また最近では着火剤による着衣着火の事故が増えていることを知らせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・火災による死亡のうち、「着衣着火」による死者数は128名(9%)であり、逃げ遅れに次いで第2位である。その128名中96名(75%)が65歳以上の高齢者である。 ・住宅火災による死者の約60%は、65歳以上の高齢者である。 <p>評 価：高齢者の身体的特徴について考えているか。</p> <p>手だて：身近に高齢者がいないかを考えさせる。</p> <p>高齢者の特徴</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身体機能の低下 足が上がらない…つまずく、転ぶ 動きが鈍い…手指の動き 腰が曲がっている…バランスが取りにくい ・感覚生理機能の低下 視覚…見えない 聴力…聞こえにくい 味覚…甘い物を好む 臭覚・触覚 温度感覚・皮膚感覚 熱中症も多い <p>評 価：家庭内事故の危険性を予測したうえで、住まいの環境を整える工夫ができるか。</p> <p>手だて：自分自身がヒヤリハッとした経験がないかを考えさせる。</p> <p>(予防・工夫の具体例) 段差をなくす 手すりをつける 滑り止めをつける 足下を明るく照らす 滑り止めのあるものを選ぶ つまずきそうなものを置かない など</p>	<p>ワークシート配付 イラスト 穴のあいた服 着火剤の事故記事</p> <p>高齢者向け携帯電話</p> <p>その他にも 階段の高さ 階段の幅</p>

生活の環境を整える

年 組 番 氏名

A. 大事故発生！ 気になる原因はな～んだ！？



原因は (着火剤) 原因は (袖口、デザイン)

こんな状況からおこる事故を (着衣着火) といいます

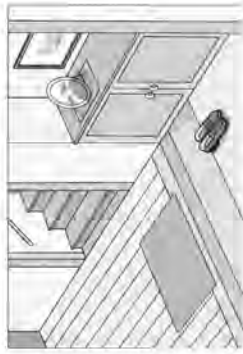
大事故になる人は (お年寄り) など弱者に多いです

Q 大事故にはならない中学生とは、どこが違うのでしょうか

(身体) 機能の特性を書きましょう

(運動) 機能	(重心) が不安定 (すばやく) 動けない
(感覚生理) 機能	(はっきり) 見えない・聞えない (低 漏) やけどする

B. 大事故発生！ おこる事故はな～んだ！？



こんな状況からおこる事故を (家庭内) 事故といいます

大事故になる人は (お年寄り) など弱者に多いです

危ないところや対策を書きましょう

危ないところ	どんな事故？	なぜおこるの？	どうしたらいい？
例) 玄関ドア	玄関扉で指を挟む けが・骨折	幼児の指は小さく細い	ゆっくり閉まるドアにかえる
階段	スリッパで滑る 転倒・転落	体重移動が悪い	滑り止め はだしにする
段差	つまづく けが・骨折	足先が上がらない	段差をなくす
玄関マット	マットが滑る 転倒・転落	重心バランスが悪い	滑り止めをつける

今日の授業の感想 (住みやすくなるために気をつけたいことを書きましょう)

図1 ワークシートの例

5. ワークシートについて

図1に本時で使用するワークシートを示した。ワークシート内に□を付けて記載している文字は、すべて生徒が授業中に書く内容である。そのため、実際に生徒へ配付するワークシートは、カッコのみの部分や空白を有する表である。

授業の最初にワークシートを配付し、イラストを見て大事故につながる「気になる原因はなにか」を考えさせ、原因をカッコの枠内に書かせる。左のイラストからは、バーベキューでの火花から、着衣着火を思い出させたい。右側のイラストでは、袖口がひろがっている服や、ボタンを留めずに、またスカーフやマフラーをしたまま、火の側に近づけば、そこから着火する可能性が高いことに気付いてほしい。そして、若者でも着火剤やファッション性を重視したデザインによっては、命にかかわるような大やけどにつながることを知らせる。

その後、高齢者に発生している着衣着火事故は、イラストに示したような炊事中を含め、たき火や喫煙時に首に巻いていたスカーフや衣服に火がついたり、仏壇のろうそくから衣服に火が燃え移ったりしているものがあると具体的に内容を説明し、高齢者や幼児に事故が多いことを知らせる。もしも衣服に火がついたら、風呂場など水のある場所へすぐに移動する、その場に転がって消火する、など対応策を話しながら、高齢者ではそれらの動作がすぐに行えるかなと問いかけながら、ワークシートの「大事故にならない中学生との違いについて」、自分の考えたことを枠内に書かせる。なぜ、そうなるのかを考えさせ、理解することで知識の定着、また実践力につながるので大切に扱いたい部分である。机間巡視で、記述の内容を確認し数名を指名し答えさせる。生徒たちの発表をもとにして、中学生とは違う身体特徴等を板書し、ワークシート左側の下には、板書したことを写させる。

また、右側には高齢者や幼児の特徴を理解した上で、生活環境を整える工夫を考えさせるようにした。

家庭内事故で事故の多い場所¹³⁾は、「階段」が31.2%と一番多い。また、「段差・敷居」が27.5%、「ドア・戸・窓」が8.3%、「床」6.4%と玄関や廊下に充当するものが多い。平成17年の人口動態統計によると、家庭内における不慮の転倒・転落事故死亡件数では、「スリッパ、つまずきあるいは、よろめきによる同一平面上での転落」が大人も含めて1,137件で、「階段またはステップからの転落」485件を大きく引き離しているとミサワホーム総合研究所は報告している¹⁴⁾。

そこで、玄関・廊下それに階段がバックに描かれている絵を国立保健医療科学院の事故防止支援サイト「子どもに安全をプレゼント～危ないのはどこかな?～¹⁵⁾」から引用した。この絵は、子どもの安全を考える教材ではあるが、家庭内の安全を考えるという点では、

高齢者の安全を考える教材としても適している。この絵からは、特に危険な場所とは気付きにくい、床の段差や、玄関マットなどにつまずいたり、滑ったりして転倒するなどの事故が多いので、先ずはそのことに気付く、事故を予防するために何ができるかを考えさせるのによいと考えた。

また、ワークシートを配付してすぐに今日の授業で高齢者について学習することがわかってしまうと、そのあとに学習する内容に意外性を感じず、学習意欲にかかわると考えた。そこで、タイトルや文面には高齢者という言葉や高齢者を意識する表現を避けている。

表には、場所だけでなく、何がどう危ないかをはっきりさせるために、「どんな事故?なぜおこるの?」という欄を設け、どんなふうに記述するかがわかるよう、幼児の場合を例にあげた。事故が起こる根本原因を知りどうすれば予防できるかを考えさせることがもっとも大切に扱うところであるが、「なぜおこるの?」「どうしたらいい?」で十分に記述できるかは不安である。そこで、ここでも、数人を指名し、発表させることで、全体の学びにしたい。最後に、高齢者や幼児などの特徴を知り、家庭内事故の危険性を予測した上で、住まいの環境をいかに工夫できるかを、授業の感想として書かせたい。

IV. 本時からの展開

1. 衣生活と住生活を連動させた課題と実践

本時の授業は、指導計画に示した最後の3時間C(3)イの「衣生活又は住生活についての課題と実践」の学習をより一層充実するという内容につなげたい。課題解決学習は、生徒自身が課題設定することが理想である。しかし、自ら課題決定することが困難である生徒が圧倒的に多いと考える。そこで、「着衣着火から安全・安心な住まいの環境を整える」というテーマを投げかければ、生徒達も目的を絞り、課題を決めやすい。例えば、「着衣着火で気をつけたいデザイン調べ」「防災商品について」「着衣着火を予防するアームカバーの製作」「高齢者の脱ぎ着しやすい衣服の調査」「おしゃれなマジックテープの靴をデザイン」「高齢者向けの商品調べ」「街にあるユニバーサルデザイン」「バリアフリー住宅について」「使いやすい手すりの高さ調べ」「階段の高さや幅調べ」「家にある介護グッズ」「幼児の家庭内事故防止グッズ使用者インタビュー」「家庭内事故の具体的な予防策」「幼児の家庭内事故」など、衣生活、住生活、高齢者、幼児と幅広い分野の課題が考えられる。しかし、安全・安心をテーマの中心にしているので、調べたことを文化祭等に展示しても全体としてまとまりがみられる。また、展示されたレポートを見て、生活全般に安全・安心の視点を持つことが大切であることが身につけやすいと信じる。

また、実施時期も住生活を2学年の前半に実施でき

れば、課題解決の学習を2学年の夏休みの宿題にできる。夏休み以降なら、冬休みの宿題にすることも可能である。

2. 弱者としてのとらえ方

運動機能や感覚機能が十分でないから、事故が多いという点では、乳幼児も同様である。幼児の身体の特徴は、「身長に対して頭が大きく、手や足が短いため、バランスがとりにくい^{16,17)}。」その中で、身長に対して頭が大きく重心が上にあるため、バランスがとりにくいので、転びやすい。転びやすいのは、歩き始めて、まだ、運動機能が未発達というだけではない。這いはじめや歩きはじめは、行動範囲が広がったり、目の位置が高くなったりして、好奇心が刺激されて、何が危険か十分に認識できず、何にでも興味を示す。そのため切り傷・擦り傷・打撲・捻挫などが多い。また、誤飲ややけど、転倒・転落なども多い。幼児の家庭内事故も、幼児一人で、あるいは幼児だけでは、とっさの判断によって身を守ることは難しい。

また、妊産婦や身体に障害のある人々や弱者にとっても、すぐに自分で対応することが難しい場合には、大きな事故につながりかねない。これらのことから、ユニバーサルデザインに発展させる取り組みも考えられる。C(3)のイ「衣生活又は住生活についての課題と実践」によって、実際に高齢者や幼児との交流を選択する生徒も出てくる可能性も考えられる。そうなれば、C(3)のイだけでなく、「A家族・家庭と子どもの成長」(3)のエ「家族又は幼児の生活についての課題と実践」にもかかわる課題といえるであろう。本時に提案した学習の流れは、衣生活の自立から、住生活の自立へ、そして、家族の生活へ、といった内容を兼ねあわせることができる。授業時間が十分確保されにくい昨今、一つの題材を複合的に、また関連させて物語的に学習させるのに好都合といえる。

V. 今後の課題

前報において、空気存在が暖かさや涼しさに関係することをとりあげれば、衣と住を関連させて授業ができると提案した。カビやダニなどの微生物対策や、洗剤等の取り扱いに関する注意などは、衣と住はもちろん食生活にも関連させて取り上げることが可能だ。このように、家庭科で学習する内容は、それぞれが分断されて存在するのではなく、何かと何か必ずずっていいほどつながっている。それらの共通項目を通して、「安全・安心」「高齢者や幼児への配慮」「環境への配慮」という視点がくりかえし登場することで、生徒達の意識にもそれらの視点が定着するものと考えている。

今後も、生活全般にかかわって「安全・安心」の視点を中心に据えた授業提案をしていきたい。

なお、本研究は日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C):課題番号 21500710)および和歌山大学教育学部「実践的地域共育推進事業」の補助によるものである。

参考文献

- 1) 今村律子、北又寿美、赤松純子、中学校家庭科における衣生活の安全・安心について—着衣着火に関する教材化提案—、和歌山大学教育学部紀要—教育科学—、60、73-80(2010)
- 2) 文部科学省、中学校学習指導要領解説 技術・家庭編、教育図書、p.3-8(2008)
- 3) 総務省消防庁、第1章 災害の現況と課題第1節火災予防(1)火災による死者の状況 平成21年度消防白書、<http://www.fdma.go.jp/html/hakusho/h21/h21/html/index.html>(2010)
- 4) 国民生活センター、服が燃えて大やけど!知られざる危険「着衣着火」、http://www.kokusen.go.jp/news/data/a_W_NEWS_031.html(1997)
- 5) 柏市消防局予防課、「着衣着火」にご注意を、<http://fdk.city.kashiwa.lg.jp/0000000217.shtml>(2009)
- 6) 中間美砂子他、『技術・家庭 [家庭分野]』、開巻一、p.130-131(2006)
- 7) 佐藤文子他、『新編新しい技術・家庭 家庭分野』、東京書籍、p.140-145(2006)
- 8) 文部科学省、中学校学習指導要領、pp.5、http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/chu.pdf(2008)
- 9) 文部科学省、中学校学習指導要領解説 技術・家庭編、教育図書、p.80-81(2008)
- 10) 八島妙子、第4章高齢期の健康・衛生と被服、小林茂雄、田中美智編著『介護と衣生活』同文書院、p.39-48(2005)
- 11) 田村照子、III応用編5楽しくやさしい高齢者・ハンディキャップ服、『衣環境の科学』建帛社、p.119-124(2004)
- 12) 国立環境研究所、熱中症患者の発生状況と今後の予測、環境儀No.32、<http://www.nies.go.jp/kanko/kankyogi/32/10-11.html>
- 13) 国民生活センター、病院危害情報からみた高齢者の家庭内事故—死亡原因のトップはやけど—、http://www.kokusen.go.jp/pdf/n-20080904_3.pdf(2008)
- 14) ミサワホーム総合研究所、住宅の中の安全対策REPORT8玄関・廊下、https://www.misawa.co.jp/kodate/tokutyou/sumuhito/pop-up/safety/report/report8_a.html#、2010年10月閲覧
- 15) 国立保健医療科学院事故防止支援サイト、指導教材 家庭内の絵～危ないのはどこかな?～、子どもに安全をプレゼント、<http://www.niph.go.jp/soshiki/shogai/jikoboshi/public/pdf/house-illust06.pdf>
- 16) 佐藤文子他、幼児の心身の発達の特徴を知ろう、『新編新しい技術・家庭 家庭分野』、東京書籍、p.164-165(2006)
- 17) 田村照子、III応用編6乳幼児の特徴と衣服、『衣環境の科学』建帛社、p.127-131(2004)